

杜甫の「登高」詩について

——潦倒 新たに停む濁酒の杯——

谷 口 真由実

潦倒新停濁酒杯 潦倒 新たに停む濁酒の杯

明の胡応麟は『詩數』の中(内篇卷五、近体中、七言)で、

然此詩自當爲古今七言律第一、不必爲唐人七言律第一也。

と絶讃したが、晩年の杜甫の詩が到達した詩境を最も如実に示すのがこの詩であろう。

だが、従来解釈は詩の表現の表層を追うことに性急で、杜甫の認識のあり方にまで考察が及んでいなかったように思われる。とりわけ、この七言律詩の尾聯の、中でも「潦倒」の意味が充分に理解されていなかったために、杜甫の紡ぎ出した思念を読み落として、この詩の核心に迫ることができていなかったと思う。まずその点を検討するたために、「潦倒」についての従来の代表的な解釈を挙げる。

①「潦倒夤縁」潦倒。(中略)久客於萬里之外、而方獨登

永泰元年(七六五)春、親友嚴武が亡くなると、生涯のうちで比較的平安な日々を過した蜀の地をあとにして、杜甫(七一二—七七〇)は長江を東に下る旅に出た。大暦元年(七六六)には夔州(今の四川省奉節県)に至っている。「登高」は、仇兆鰲『杜詩詳註』(卷之二十)によると、大暦二年(七六七)、五十六歳のとき、その夔州での作である。⁽¹⁾

風急天高猿嘯哀 風急に天高くして 猿嘯哀し

渚清沙白鳥飛迴 渚清く沙白くして 鳥飛び廻る

無邊落木蕭蕭下 無辺の落木は蕭蕭として下り

不盡長江滾滾來 不尽の長江は滾滾として来たる

萬里悲秋常作客 万里 悲秋 常に客と作り

百年多病獨登臺 百年 多病 独り台に登る

艱難苦恨繁霜鬢 艱難 苦だ恨む繁霜の鬢

臺、以多病之人、而對景悲秋。其惟歎難潦倒甚矣。安得不添白髮而廢酒杯乎。(元、張性『杜律演義』前集)

②『絶交書』「潦倒瓮疎」又「濁酒一杯」。時公以肺病斷飲。(清、朱鶴齡『杜工部詩集』卷十七)

③久客則艱苦備嘗、病多則潦倒日甚。下二句亦用分承、時公以肺病斷飲。(清、楊倫『杜詩鏡銓』卷十七)

④絶交論、潦倒粗疏。魏文帝樂府、「嘉餽不嘗、旨酒停杯。」朱注、時公以肺疾斷酒、日新停。絶交論、濁酒一杯。(清、仇兆鰲『杜詩詳註』卷二十)

以上、いづれも、結句の「潦倒」は普の嵇康の「山巨源に与へて交りを絶つ書」(與山巨源絶交書)の「潦倒麤疎」を踏まえ、「新停濁酒杯」は、この時、杜甫が肺病のため飲酒をやめたことを詠じていると解釈している。この理解は、現代の注釈者も同じである。

①末二句用当句对法、艰難对苦恨、潦倒对新停。(中略)潦倒、犹衰頹、因多病故潦倒、《夔府咏怀》诗云「形容真潦倒」、可证。時杜甫因肺病戒酒、故曰新停。消愁借酒、今又因病不能举杯、岂不更可恨。(蕭涤非『杜甫詩选注』⁽³⁾、一九七九年、人民文学出版社)

②诗人备尝艰难潦倒之苦、国难家愁、使自己白发日多、更加上因病断酒、悲愁就更难排遣。(『唐诗鉴赏辞典』、

上海辞书出版社、一九八三年。陶道恕の解釈。)

③零落のうちにこのごろはからだのぐあひから濁酒の杯を手にすることさへやめてしまった。(註・潦倒：零落不振のさま。)(鈴木虎雄譯註『杜少陵詩集』、一九一七年、續國譯漢文大成)

④私はちかごろ病気のため濁酒の杯をくむことをやめてしまったが、いよいよなげやりの気持ちにならざるを得ない。(註・潦倒：何事もなげやりになる。)(黒川洋一訳『杜甫』、一九五七年、中国詩人選集、岩波書店)

⑤(しかも)この老いさらばえた私にとって、僅かな慰めであった濁り酒の杯さえ、病のために手にとることをやめたのである。(註・潦倒：老いほれること。落ちぶれること。転じて投げやりになって、どうしても物にかまわぬさまにも用いることば。)(目加田誠訳『杜甫』、一九六五年、漢詩大系、集英社)

従来の解釈は以上のように、「潦倒」が嵇康の「與山巨源絶交書」の用例を踏まえて用いられているという理解に立ちながら、「落ちぶれること」、或いは「何事もなげやりになる」と解している。ところが実際には、嵇康の「與山巨源絶交書」の「潦倒」は従来の解釈のような「落ちぶれること」「何事もなげやりになる」意を表す言葉ではない

のである。

二

詩語として「潦倒」の語を用いた例は、杜甫以前には見当らない。⁽⁴⁾つまり、最初にこの言葉に詩に用いたのは杜甫ということになる。このことから、「潦倒」がいかに杜甫の詩を考へる上で重要な言葉であるか、がわかる。しかし、まず杜甫に先行する散文の用例の意味を確認しておきたい。

『文選』には嵇康の「山巨源に与へて交りを絶つ書」(第四十三卷)の一例しか見えず、今のところこれが最も早い例である。

濁酒一盃、彈琴一曲、志願畢矣。足下若𦵏之不置、不_○過_○欲_○爲_○官_○得_○人_○、以_○益_○時_○用_○耳。足_○下_○舊_○知_○吾_○潦_○倒_○羸_○疎_○、不_○切_○事_○情。自_○惟_○亦_○皆_○不_○如_○今_○日_○之_○賢_○能_○也。

「あなたは昔から私が『潦倒羸疎』つまり、挙措がのろくてしまりのない大まかな性格で、しかも現実の事情に疎いことを御存知のほゞです」と、嵇康は自分が役人にふさわしくないことを説いて、官僚に就けようとする山巨源に辞退を表している。『文選集注』に『(文選) 鈔』に曰く、潦倒は長緩の貌なりと(鈔曰潦倒長緩兒。)とあるように、挙動のゆっくりしたさまである。だが、ここでは更に

政治的社会的現実と自己の生との間のへだたりを意識しつつ、自己の生き方を自負に満ちて突きつけており、反語的ニュアンスを帯びている。

次に、『抱朴子』百里(外篇、卷之二十八)には、「或有潦倒疏緩而致弛壞者矣」の例が見え、この「潦倒」も、嵇康の「與山巨源絶交書」の例と同様に、政治の実務に機敏に対処できない、挙動の遅い性格をいう。ここで並列されている「疏緩」は『北齊書』王暉伝に「我性質疏緩、不堪時務」と見え、やはり政治の実務にうとい性格をいう語であるが、そのことも「潦倒」の意味する所を暗示するだろう。

また『北史』崔瞻伝(卷二十四)には、次のような例がある。

瞻性簡傲、以才地自矜、所與周旋、皆一時名望。(中略)性方重、好讀書、酒後清言、聞者莫不傾耳。自天保以後、重吏事、謂容止醜籍者爲潦倒、而瞻終不改焉。

崔瞻という人物は、「醜籍」(気高く奥ゆかしい)な人物であったのだが、北斉の天保(五五〇―五五九)年間に官吏の実務が重要視されると、挙措のおおらかで奥ゆかしい彼のような人物は「潦倒」と批判されるに至ったという。この「潦倒」も、やはり実務能力に欠けた、挙措ののろい

さまである。

以上の三例から次のように言えよう。「潦倒」は、官僚体制の実務の機能重視の立場からは、要領が悪く、行動・挙措ののろい性格を表わす否定的な評価の言葉である。しかし、反面、嵇康が「濁酒一盃、彈琴一曲にて志願畢る」と述べるように、また崔贍がそうであるように、充溢した生を自己の中に抱いた、おおらかで奥深い性格をも表す。このように「潦倒」は、否定的評価と肯定的評価とが重ね合わされた言葉なのである。

初唐の王績の「程道士に答ふる書」(答程道士書、『全唐文』卷一百三十一)も同様に解することができる。

吾受性潦倒、不經世務、屏居獨處、則蕭然自得、接對賓客、則茶然思寢。

自分の本性について、官僚体制側の視点では、実務に疎く、挙動ののろいかもしれないが、本来の人間の視点では、世俗の権威や名利を超えた真に充実した生き方であると反語的に述べて、そこに強い自負をこめているのである。

このように、晋から初唐に至る「潦倒」は、意味に大きな変化がなく、ほぼ一貫している。「潦倒」とは、表層では、実務に疎い挙措ののろい性格を表すが、深層、または

根源において、官僚体制の価値観に支配されることなく、人間本来の充溢した生を志す態度・生き方を表す言葉なのである。

三

詩語に初めて「潦倒」の語を取り込んだのは杜甫であるが、では第二章に挙げた先行の「潦倒」をどう受け継ぎ、どう変化させたのかを次に検討する。杜甫の用例は四つあるが、その四例は以下のとおりである。

① 戯れに閬郷の秦少府に贈る短歌(戲贈閬郷秦少府短歌、『杜詩詳註』卷之六) ② 秦州にて勅目を見れば、薛三璩は司議郎を授けられ、畢四曜は監察に除せらる。二子と故有り、遠く遷官を喜び、兼ねて素居を述べ、凡そ三十韻(秦州見救目薛三璩授司議郎畢四曜除監察、與二子有故、遠遷官兼述素居凡三十韻、『杜詩詳註』卷之八) ③ 夔府書懷四十韻(『杜詩詳註』卷之十六) ④ 登高(『杜詩詳註』卷之二十)

①の詩は、乾元元年(七五八)、杜甫四十七歳の作。左拾遺より華州司功參軍事に貶されていた杜甫が、赴任先から東都へ向かう折、閬郷(河南省陝県の西)の県尉の秦氏に贈った詩。

去年行宮當太白 去年 行宮 太白に当たる

朝回君是同舎客 朝より回れば 君は是れ同舎の客

同心不滅骨肉親 同心 骨肉の親に滅ぜず

每語見許文章伯 每語 文章の伯を許さる

今日時清兩京道 今日 時に清し 兩京の道

相逢苦覺人情好 相逢はば人情の好きを覺ゆ

昨夜邀歡樂更無 昨夜 歡を邀へて 樂しみの更なる無し

多才依舊能潦倒 多才 旧に依りて 能く潦倒たり

第一・二句は、前年（至徳二載）四月、賊中より、杜甫

が肅宗の鳳翔の行在所に馳せ参じた功によって左拾遺に任ぜられ、秦氏と同じ宿舎に身を寄せたことをいう。

末二句は、「昨夜のあなたの歓迎ぶりは、これ以上の楽

しさは考えられないほどでした。あなたは才能が豊かなの

に、（県尉という激務にある今も）昔のままに、このように

潦倒として実務に疎い様子で、しかし根源ではゆったりと

本来の充実した生を営んでいらつしやる」と結んでいる。

この「潦倒」を含む一句は、秦氏に向つて発せられたと同

時に、我が身を投影したものではないか。左拾遺として房

瑄の罪を弁護したために、皇帝の怒りに触れたのはこの詩

の前年であり、華州司功參軍事に貶せられたのもそれが原

因であった。その無念さと、官僚政治への憤懣・失望とを

懐きながらも、それを理由にやすやすと現実を切り捨て

て、見て見ぬふりをして退隱するなど杜甫には到底できないことであつた。強い自負と人間への信頼ゆゑに絶望すまいとする。その、いわば失望と絶望のはざままで生き抜こうとする生きざまが、この「潦倒」であろう。

②は、乾元二年（七五九）、杜甫四十歳の秋の作。杜甫は官を辭して秦州にたどりついてはいたが、勅目（官吏を任命する詔書）には旧友の名があつた。次は、その五言排律の冒頭四句。

大雅何寥瀟 大雅 何ぞ寥瀟

斯人尙典型 斯の人 尙ほ典型

交期余潦倒 交期 余は潦倒

材力爾精靈 材力 爾は精靈

第二聯で、杜甫は「あなた方と私は以前親交がありましたが、私の実務に疎く、挙措ののろい性格であるのに対して、あなた方の能力には、秀れた靈妙な氣がそなわっていました」と述べる。「潦倒」は、材力（能力）を評する韻の「精靈」と対に用いられている。ここでもやはり、「落ちぶれたさま」ではなく、実務能力を要求する官僚体制と、要領が悪く、挙措が遅い自分の性格との間のずれを感じとつて、官吏に適しないと認めながら、むしろそこに独自の自負を抱えていることを表す。

③の「夔府書懷四十韻」は、大曆元年（七六六）五十五歳の秋、夔州での作。自らの来し方を追懐する形で詠じているが、次はその第四十五句から第四十八句。

廟算高難測 廟算 高くして測り難し

天憂實在玆 天憂 実まことに玆ここに在り

形容眞潦倒 形容 眞まことに潦倒

答效莫支持 答效 支持する莫し

「私のありさまが、『潦倒』だという理由で、私がいくら君恩に報いたいと望んでも、私を支持する者などいない。」この「潦倒」は、表層では実務に疎く、要領の悪い自らの性格を表す。しかし深層には、無限の自負と悲憤が込められている。それは、政治社会の現実が理想からへだたってしまったことを憂え、かつ正そうとする杜甫をせせら笑うように現実まことに屈している官僚達への悲憤であった。

以上三例の「潦倒」は、表層では自己の性格を否定的に評しているが、逆に深層には、官僚体制に仰合せず、自分の心の命ずる真に充実した生のあり方を肯定する強い自負が見え隠れしている。とりわけ①の例は、嵇康「與山巨源絶交書」や『北史』崔瞻伝の用例を用いながら、新しく創出された杜甫独自の用法といえよう。先行用例では、表層に対する深層の意味は文字通り内包されていた。だが、杜

甫は、「潦倒」を、一人の人物の性格について、官僚体制の視点と人間の視点との両面から描出する言葉として、詩中に初めて登場させたのである。そこには自嘲を含みつつ、官僚体制に妥協することなく対峙して、自らの信じる真の生を生きぬこうとする姿勢が提示されている。

四

杜甫の「潦倒」についての従来の解釈は、第二章で検討した通り、先行用例に見出せなかった。従って、杜甫の「潦倒」に従来のような解釈が成立しないことは明らかである。では、何故、そのような解釈が生じたのであろうか。実は「潦倒」の語は、むしろ杜甫以後に、「落ちぶれたさま」「衰老のさま」を表す言葉として用いられるようになった経緯がある。おそらく、杜甫を境い目として、「潦倒」の意味する内容は変化していった、と考えられる。

その理由を考察するなら、まず第一に、先述のように、杜甫の用法そのものが重層的な意味を持っていることが挙げられよう。その重層性のために、杜甫が「潦倒」の語で把握した内容を、すぐ他の一つの言葉に置き換えることが不可能であり、いかにもそれらしいが曖昧な解釈が生じたのではないか。

第二に、「潦倒」(lao dao 或いは liao dao) が、オノ

トペアの一つ、疊韻の擬態語であり、そのために口語的で、他の複合語以上に派生的な意味が生じ易かったことが考えられる。⁽⁷⁾ 符定一・『聯縣字典』は、「○舉止跌宕不自檢攝也。○轉爲落度。潦・落聲同。倒・度聲近。」と解説している。しかし、現代語でこそ「潦倒」(liao dao・lao dao)と「落度」(lao du・lao du)とは発音が似ているものの、前者と後者の韻尾は言うまでもなく異なる。「潦倒」が上声の韻尾を持つのに対して、「落度」は、「落拓」「落託」「落魄」「託落」などとともに、入声音の韻尾の疊韻語で、意味もほぼ等しい。これら「落度」系の語にはまず、(一)「失意・寂寞」の意があり、転じて、六朝時代には已に(二)「奔放不羈で、拘束されないさま」の意が生じていた。⁽⁸⁾ このことから一つの推測が可能である。初めは「潦倒」と「落度」系の言葉は、発音が異なり、意味にも明白な差異があった。ところが「潦倒」(実務に疎く、挙措ののんびりしたさま)と「落度」の(二)の意味とは近似していると意識されるようになり、その上、両者とも疊韻の擬態語で、発音も似ていた。八世紀後半より入声韻尾の弱化傾向が進んでいたとすれば、両者の発音は一層酷似していた可能性がある。そこで、両者の間に混同が起こり、同義語とみなされたのではないか。

第三に、原義での「潦倒」な人物―官僚社会の現実に疎く、自由に生きることができず、また、合わせることを潔しとしないので、結果的に―杜甫がそうであったように―官僚社会や世俗からはみ出し、不遇の人生を送ることが多かったということが考えられる。そのため、本来個人の性格を表す言葉であったものが、△「潦倒」な人物▽△「落ちぶれている」人物△と意識されるに至り、意味が移行したのではないか。あるいは、盛唐から中唐・晩唐へと、背後の社会状況に変化があつて「潦倒」たる人物がますますはじき出され、落ちぶれざるを得なかったのかもしれない。

以上、第一・第二・第三で考察した原因が、前後に、また同時に進行した結果、「潦倒」は、杜甫の生きた八世中葉を境に、意味が原義から移行して行つたのだろう。宋の呉炯の『五總志』には次のような記述がある。

魏天寶以後、重更事、謂容止醞藉爲潦倒。宋武帝舉止行事、以劉穆之爲節度。此非醞藉潦倒之士耶。而後世以潦倒爲不偶之辭、誤矣。

この記載から、呉炯が「潦倒」は本来、「醞藉」な(おおらかに奥ゆかしい)人物を評する語だと考えていたことは明らかである。しかしまた、それをことさらに論じなければ

ばならなかったことが示すように、宋代、すでに一般に「潦倒」が不遇の辞と解釈されていたのも明白な事実である。

このように、「潦倒」の意味は大きく変化したので、逆以降、八世紀中葉以前のこの語の解釈も、後世の意味で解釈されるに至ったと考えられる。

五

以上は、十二世紀余りの間、地下に埋没していた言わば原「潦倒」を掘り出す作業に他ならない。では、杜甫が最も晩年に「潦倒」を用いた「登高」の場合は、どのように解釈すべきなのか。また、「潦倒」を捉え直すことでこの詩をどう読みなおすことができるのか。

風急天高猿嘯哀、渚清沙白鳥飛迴。

無邊落木蕭蕭下、不盡長江滾滾來。

萬里悲愁常作客、百年多病獨登臺。

艱難苦恨繁霜鬢、潦倒新停濁酒杯。

詩の前半は、激越な情景である。第一句、「風急天高猿嘯哀」は、自然Ⅱ世界の内包する悲哀を表す。異常に緊迫した世界と、広大な空間に放り出された存在の不安定さに耐えかね、おののくように、生けるものがふりしぼる悲しみの声。第二句では、「渚清沙白鳥飛迴」と、神々しいま

でに清浄な世界を飛びめぐる鳥の孤独が描かれる。鳥は清澄すぎる世界から疎外されて、飛び続ける。第三句「無邊落木蕭蕭下」は、首聯に描かれた生けるものの悲哀と孤独感を丸ごと抱きかかえながら、自然Ⅱ世界がその悲しみを嘆くかのようにざわめくありさまである。どこまでも木々は落葉し続ける。生ける物達の悲しみを包み込んで。だが、自然の悲哀が、悲哀極まって単に生命現象を消滅させるだけの方向へと突き進みはしない。第三句の言わば存在の悲しみは第四句に至って、止揚される。「滾滾來」は、それまでの悲哀を飲みこんで、なお豊かにうねり続ける流れを描いて、自然Ⅱ世界のデモーニッシュな力の再生を表わす。デモーニッシュな力を孕んで神々しくおどろおどろしい世界は、むしろ悲しみを荷うがゆえに、ひたむきで異様なまでに奔放な生命力を発現する。杜甫は、晩秋の事象を描きながら、実はその事象を突き抜けた向うにある根源的な世界のあり方とその力を描いている。

後半に描かれるのは、詩の前半に繰り広げられた世界に、ただ一人対峙している詩人である。第五句、「萬里悲秋常作客」は、生涯を全体にわたって見わたしたとき、詩人に意識された、よりどころのない悲哀を表す。しかし、それはまだ潜在している。第六句、「百年多病獨登臺」に

おいては、今ここにある自己が、この世界からまぎれもなく疎外されているという生々しい孤独を詩人は感覚している。第五句は生涯をふり返って、そこにただよい続ける潜在的な悲しみを表わし、他方第六句は、現在、詩人が感受しつつある孤独感を表わす。そこで思い合わされるのは首聯である。第一句は、未だ潜在的な悲しみで、聴覚にのみ捉えられているが、第二句は、現に目に映じた顕在的な孤独であった。この言葉の畳み方は、第五句・六句のそれと非常に似ている。以上のように頸聯には、詩人の個としての悲哀と孤独感が描かれていたが、第七句「艱難苦恨繁霜鬢」は、それを「艱難」の一語に収斂して、詩人が己の運命を嘆く言葉である。

詩の前半では、第一句の存在の悲哀と第二句の孤独が、第三句に収斂される。そして第四句に至って悲しみは止揚され、異様なまでの奔放な生命力が発現されていた。一方、目を転じて後半四句を見れば、第五句の詩人の個としての悲哀と第六句の孤独感が、第七句に収斂されている。つまり、後半は前半と全く同じ構造になっているのである。前半では、第四句において、世界が荷う運命の悲しみが止揚されていた。そのように、結句では、第七句に収斂された感情―自己の運命への悲しみ―が乗り越えられてい

るのである。

この結句については、第一章に従来の解釈を整理しておいた。そこには二つの大きな問題があった。第一は、「潦倒」の解釈の問題であり、第二は、「新停濁酒杯」の解釈についての問題である。まず、後者は、朱鶴齡が「時に公、肺病を以って飲むを断つ」と注して以来、たとえば「このごろはからだのぐあひから濁酒の杯を手にするこゝさへやめてしまった」（鈴木虎雄訳）、「また貧乏と共に、もう一つありがたくない伴侶であった肺病、すなわち喘息の持病は、晩年の杜甫をして、時に酒を廃せしむるに至った」（吉川幸次郎『杜甫ノート』杜甫と飲酒、一九五四年、新潮文庫）のような解釈が定着している。だが、特に「断酒」したと杜甫が述べていない以上、病気のために酒をやめたと解釈するのは唐突に感じられる。黒川洋一『杜甫』（前掲書）の解釈も同様であるが、同氏の「中国文学における悲哀の浄化について」の「登高」について言及する段では「口に運ぶ濁酒の手をおしとどめて感慨にふけるのである」と解釈している。また、鄧魁英・聶石樵選注『杜甫選集』（一九八三年、上海古籍出版社）も同じ解釈である。舊解以爲杜甫患病、故停杯、非。是年《九日五首》即有「重陽獨酌杯中酒」之句、可知「新停」者「方飲罷」

之意。

確かに『九日五首』には飲酒のさまが描かれていて、決して病のために酒をやめたとは述べていない。「停杯」は「酒を断つこと」なのか、「ふと飲むのをとどめる」意なのか。それを明らかにするため「停杯」の用例を拾ってみる。

(1) 跂窓催酒熟、停杯待菊花。(庾信、衛王贈桑落酒奉答)

(2) 耿耿不能寐、京洛久難羣。橫琴還獨坐、停杯遂待君。

(楊素、贈薛內史詩)

(3) 金樽清酒斗十千、玉盤珍羞直萬錢。停杯投筋不能食、

拔劍四顧心茫然。(李白、行路難三首其一)

(4) 青天有月來幾時、我今停盃一問之。(李白、把酒問月)

いずれの「停杯」も、今まで動かしていた酒を酌む手を暫くとどめる意である。酒を飲んでる間に何かに心を動かされて、感慨にふけったり、来たるべき酒や友を待ち受けるしぐさである。この詩の場合も、「酒を断つ」ことではなく、独酌していた杜甫の心中に何か新たな思いが沸きあがり、「ふと濁り酒の杯を酌む手をとどめた」と解するのが自然でふさわしい。濁酒の杯をとどめさせた新たな思いとは、一体どのような思いであったのか。その思いこそ「潦倒」である。「潦倒」は「なげやりになる」でも、まして「零落不振」のさまでもない。いわば今まで惰性的に動

かしていた酒を酌む手を押しとどめるような、心をゆるする感情であろう。

以上、「新停」の考察は、詩の構成から先に述べた仮説——結句に於いて、第七句に収斂された己の運命への悲しみが止揚される——と一致すると考えられる。詩人は酒を酌みつつ、己の運命を嘆き悲しんでいたが、「潦倒」という思いによって、悲しみは乗り越えられて行く。ふと酒を酌む手をとどめたのは、そのためである。

では、詩人に己の運命の悲しみを乗り越えさせた「潦倒」はどのような思いであろうか。本稿第二章に既に論じたように、「潦倒」は、重層性を帯びた言葉であった。この「潦倒」が悲しみを突き抜けさせたのも、やはり重層的な意味を持つために他ならない。それは、次のような意識だったのである。「私は世俗社会の現実と疎く、その歩みは埒のあかない悠長さであるけれど、しかし逆に、心の命ずるままに詩人としてともかくも充溢した生を生き抜いてきたのだ」と。ここでは、官僚体制、或いは既成の伝統的な価値観と、自己の志す生とのへだたりを意識し、そのはざまに生ずる苦悩や悲しみを乗り越えて、自己の生があり方を肯定している。そして、詩人が自分の生を「潦倒」と認識したとき、詩の前半で予感された——自然——世界が悲

しみを取り込み、それゆえにかえって自在な生命力を発現するといふ―世界の根源のあり方と、その悪魔的なまでの力が、彼を震撼させ貫いて、己の運命への悲しみを突きかかえなげさせたのであろう。自然と世界が悲しみを抱きかかえながら、むしろかえって、デモニーニッシュな力を発現するというこの逆説に詩人は共鳴し、自分の中にそのあり方を取り込んで、悲しみを力として生きようという新しい思いに自己を押し出していった。ふと濁り酒を酌む手をとどめたのは、内に沸き起ったこの新たな思いが、波のようにうち寄せ続けていたからである。

夔州では、日中でさえ日光がわずかしか届かないような切り立つ峡谷が、杜甫の憂愁を募らせていた。詩題の「登高」は、まさに自然と世界に自らを対峙させることを暗示している。杜甫は自然と世界を新しく認識することによって自己の生のあり方を問い直し、今にも絶望に閉ざされうになる自分を再生しようとして、この詩を創作したのであった。

「潦倒」は、重層性を帯びた言葉であったが、この詩において、既成の価値観の拘束を取り払い、突き抜けて、内なる自然の命令に従って生きようとする生きざまを表す。そして、「潦倒」こそ、自然の根源のあり方とその力

を自己の内に見いだし、自己の生の意味を再生・展開する契機となっていたのである。

注

(1) この作品の制作年及び制作地については、説が分かれているが、次の二説に整理できる。

① この詩を「九日五首」の第五首とはせず、成都、或いは綿州・漢州・梓州あたりでの作とする。それは上元元年（七六〇）四十九歳から永泰元年（七六五）五十四歳の五月までの間に当たる。吳若本『杜工部詩集』以下、元の張性の『杜律演義』、『錢注杜詩』がこの説をとる。

② 「九日五首」の第五首に「登高」を編し、「猿嘯哀」の句などから夔州、大曆二年（七六七）五十六歳の秋の作と推測する。清、朱鶴齡『杜工部詩集』以下、『読杜心解』、『杜詩鏡銓』、『杜詩詳註』などの他、近年の注釈はほぼこの説に依る。現在、②の説が、代表的解釈とされているので、この説に従った。

(2) 魏文帝「秋胡行」(『先秦漢魏晉南北朝詩』魏詩卷四)に「朝与佳人期、日夕殊不来。嘉肴不嘗、旨酒停杯。(以下略)」と見える。仇兆鰲は杜甫が肺病のために断酒したという朱鶴齡の説の傍証としてこの例をひくが、杯をまだ酌まず、とどめたまま佳人を待つ描写であって断酒の意ではない。

(3) 蕭滌非『杜甫詩選注』(一九八三年、上海古籍出版社)もほぼ同様の解釈であり、「潦倒」衰頹・失意」と解している。

(4) 詩では、以下に挙げる索引、及び『先秦漢魏晉南北朝詩』（前掲書）には「潦倒」は見当らなかつた。

『詩經』・『楚辭』・全漢詩・全三国詩・『文選』・『玉台新詠』・曹植・阮籍・陶淵明・謝靈運・謝朓・駱賓王・孟浩然・王昌齡・王維・李白・岑參（錢起・韋應物・張籍・柳宗元・李賀・李商隱・温庭筠・魚玄機・皮日休）

(5) 『漢書』薛広徳伝（卷七十一）に「広徳為人温雅有醜藉」とあり、顔師古の注に「服虔曰、寛博有余也」とある。

(6) 拙論「杜甫の『戯題詩』について——戯の意識を探る——」（『お茶の水女子大学中国文学会報』第五号、一九八六・四、お茶の水女子大学中国文学会）の中で、「戯」の意識がこの詩の結句にあることを論じた際、その手がりとしてこの「潦倒」の重層性について述べた。

(7) 田中謙二「『従容』考」（『漢文教室』第八十一号、一九六七・五、大修館書店）に擬態語について詳しく論じられている。

(8) 周一良『魏晉南北朝史札記』（一九八五、中华书局）四十・四十一頁に「落度」について言及している。

(9) 中国文化叢書『言語』（一九六七年、大修館書店）の平山久雄「中古漢語の音韻」に次のような記述がある。（一六三頁〜一六六頁）

中古音の体系がとくに8世紀後半において大きな変化を示すのは、安史の乱による社会混乱の結果、伝統的規範の力が弱されたことと関係があるのでなかろうか。（中略）羅常培『唐五代西北方音』は、敦煌から発見された教種の藏漢対

音資料の研究である。残巻の年代は8世紀から11世紀に及び、敦煌など西北地方の方言的読音を反映すると見られる。

これらの資料には、（中略）入声韻尾^ㄛが弱まって^ㄝで写される傾向、などがあらわれている。これらにも発音傾向としては、中央地方でも生じていたものがあるかも知れない。

（中略）唐代以後の北方の音韻史は、重紐の消失のように南方方言でも起こった若干の変化をのぞき、これら官話方言的音韻特徴への傾斜が次第につよまって行く過程として捉えられる。北宋のはじめ、邵雍の著『皇極經世書』の「正声正音（略図）」から知られる当時の汴洛地方の音韻体系では、（中略）入声韻尾のうち^ㄛ、^ㄎは合流して^ㄝに弱まり、韻母の数も減少するなど、官話方言への過渡が一層著しくなってくる。

00 黒川洋一「中国文学における悲哀の浄化について」（『四天王寺女子大学紀要』第二号、一九七〇・三）

（筑波大学大学院博士課程後期）